行動観察時における人物と状況への注意の文化差

—アイトラッキングによる自発的推論のプロセスの検討—

○清水由紀¹・James S. Uleman²

(¹ 埼玉大学教育学部・² ニューヨーク大学心理学部)

キーワード：自発的特性推論, 比較文化, 社会的認知

Cultural differences in attention to person and situation when observing others' behaviors: An eye-tracking study of spontaneous inferences

Yuki SHIMIZU¹ and James S. ULEMAN²

(¹ Faculty of Education, Saitama University, Department of Psychology, New York University)

Key Words: Spontaneous trait inferences, Cross-cultural comparison, Social cognition

我々は、他者の行動を見た時に、その人物のパーソナリティ特性や行動の生じた状況について瞬時に推論する。このような推論はしばしば意図や意識なしに生じ、自発的特性推論(Spontaneous Trait Inference: STI)および自発的状況推論(Spontaneous Situation Inference: SSI)と呼ばれる。STIとSSIは同時生起しうることが報告されている(e.g., Ham & Vonk, 2003)。

文化心理学では、北米と東アジアの人々の自他のとらえ方にはシステムティックな違いがあることが示唆されてきた(e.g., Markus & Kitayama, 1991)。これと対応して、北米人は日本人よりもSTIの生起の程度が大きくより自動的であること(Shimizu, Lee, & Uleman, 2017)、北米人はSTIの方がSSIよりも生起の大きいのにに対し、日本人ではこれらが同程度起きること(Lee, Shimizu, Masuda, & Uleman, 2017)などが示されている。しかしこれらの違いが、行動観察時の人物と状況への注意の時点から見られるのかどうかについては明らかではない。そこで本研究では、STI研究において従来用いられてきた潜在記憶課題への反応に加えて、行動観察時の注視行動を分析することにより、STIとSSIの生起プロセスにおける文化差をより詳細に検討する。

方法

参加者 日米の大学生154名。内訳は、日本人55名、ヨーロッパ系アメリカ人51名、アジア系アメリカ人48名。

手続き PCを用いて個別に実施した。潜在記憶課題として誤再認パラダイムを用いた。①接触課題；特性と状況のいずれも暗示している行動文(e.g., 「彼女は簡単にフェンスを飛び越えた」：「運動神経がいい(特性)」と「低い(状況)」を暗示)を、人物と状況の写真各1枚と共に提示した。計60試行。各参加者の写真への注視をアイトラッカー(Tobii Pro X3-120)で測定した。②フィルター課題；アナグラム課題を5分間解いてもらった。③再認課題；人物の写真と特性語または状況語をペアで提示した。人物写真は接触課題と対応しており、参加者は同じ写真と一緒に提示されていた文の中に、ペアとなっている単語があったかどうかを判断するように求められた。接触課題で特性・状況暗示文を見た時点で自発的推論が生じていれば、その単語が「あった」と誤再認すると想定される。試行の半数は特性語が、半数は状況語が提示された。またそれぞれ半数は接触課題で暗示されていた語が(実験試行)、半数は無関係語が提示された(統制試行)。

結果

自発的特性・状況推論 再認課題における誤再認数を従属変数とし、文化(3)×単語(2；特性・状況)×試行(2；実験・統制)の分散分析を行った結果、文化の主効果($F(2, 151) = 6.01, p < .01, \eta_p^2 = .07$)、単語の主効果($F(1, 151) = 18.27, p < .001, \eta_p^2 = .22$)、交互作用の主効果($F(1, 151) = 83.07, p < .001, \eta_p^2 = .36$)、文化×試行の交互作用($F(2, 151) = 5.63, p < .01, \eta_p^2 = .07$)が有意だった。STI・SSIの大きさ(実験試行と統制試行の得点差)の違いを文化別に調べたところ、ヨーロッパ系アメリカ人はSTI

の方がSSIよりも大きい傾向があったが($p = .089$)、アジア系アメリカ人および日本人においては差はなかった(Fig. 1)。

注視時間 接触課題における人物・状況写真への注視時間を従属変数とし、文化(3)×対象(2；顔写真・状況写真)の分散分析を行った結果、文化の主効果($F(2, 151) = 5.59, p < .01, \eta_p^2 = .07$)、対象の主効果($F(1, 151) = 560.74, p < .001, \eta_p^2 = .79$)、文化×対象の交互作用($F(2, 151) = 3.89, p < .05, \eta_p^2 = .05$)が有意だった。下位検定の結果、いずれの文化においても状況よりも顔への注視時間が長かったが、両者への注視時間の差はアジア系アメリカ人・日本人よりもヨーロッパ系アメリカ人の方が大きかった($p < .05$) (Fig. 2)。

自発的特性・状況推論と注視行動の関連 STI・SSIの大きさと注視時間の相関を調べた結果、STIと人物写真への注視時間の間にのみ有意な相関がみられた($r = .28, p < .001$)。

Fig. 1 自発的特性推論と自発的状況推論

Fig. 2 接触課題における注視時間(秒)

考察

先行研究では北米人の方が東アジア人よりも、行動を人物の特性に帰属しやすいことが示されてきた(e.g., Nisbett, Peng, Choi, & Kitayama, 2001)、本研究の結果からこの違いは行動観察時における注意や自発的推論において、すでに生じていることが示唆された。今後は発達のアプローチによりこのような文化差の起源について検討する必要がある。

参考文献

- Ham, J., & Vonk, R. (2003). Smart and easy: Co-occurring activation of spontaneous trait inferences and spontaneous situational inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 434-447.
- Lee, H., Shimizu, Y., Masuda, T., & Uleman, J. S. (2017). Cultural Differences in Spontaneous Trait and Situation Inferences. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48, 627-643.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review*, 108, 291-310.
- Shimizu, Y., Lee, H., & Uleman, J. S. (2017). Culture as automatic processes for making meaning: Spontaneous trait inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 69, 79-85.